

琉球大学学術リポジトリ

[研究論文] シテアル再考 -他動性の観点から-

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2009-04-06 キーワード (Ja): 他動性, 影響性, 対象指向性, 変化の結果の継続, ペルフェクト キーワード (En): transitivity, affectedness of subject, object-oriented, resultative, perfect 作成者: 副島, 健作, Soejima, Kensaku メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9532

シテアル再考 — 他動性の観点から —

副 島 健 作

要 旨

シテアルとシテイルとの使い分けについては従来、意図性が関与していると考えられ、日本語教育においてもそのように説明されてきた。しかし、その多くは、動詞の自他という語彙的側面とシテアル、シテイルという文法的側面を混同した結果導出されたものであり、実情を反映しているとは言えない。そこで本稿は、沖縄県内大学に在籍している日本語母語話者にたいしてシテアルの自然さと他動性にかんするアンケート調査を行ない、シテイルとの使い分けと使用条件について考察した。その結果、シテアルが実現しやすいのは他動性のもっとも高いプロトタイプの他動詞であることがあきらかになった。また、それ以外の動詞の場合でも以前に成立した運動の影響が主体に残っていると認識される状況が設定されれば、シテアルが可能であることがわかった。これらの結果から、シテアルとシテイルの違いも、シテアルの対象指向的な特性から説明できることを確認した。

キーワード：他動性、影響性、対象指向性、変化の結果の継続、ペルフェクト

0. 序

これまで日本語教育においては、シテイルとシテアルとの違いは次のように説明されてきた(寺村 1984: 147-152, 森田 1988: 123-131, 庵ほか 2000: 63-64 など)。

(1) 日本語教育におけるシテイルとシテアルの説明

(ア) 自動詞と他動詞が対になっている動詞では、「自動詞 + テイル」, 「他動詞 + テアル」の形でどちらも状態を表す。

① 「他動詞 + テアル」はだれかの意図的な働きかけがあって、その結果現在の状態があるという意味になる。

② 「自動詞 + テイル」は自然にそうなった場合や、他の人の働きかけによらず、自分の力でそうした場合の状態を表す。

(イ) 対応する自動詞がない「他動詞 + テアル」では何かのためにあることが完了していることを表す。

これらの例文は以下の通りである。

(2) 窓が開けてある。 ((ア-①)の例)

(3) 窓が開いている。 ((ア-②)の例)

(4) 新出語句の意味はすでに辞書で調べてある。 ((イ)の例)

一見、意図性の有無で全く明快に説明できそうであるが、実は、以下の点で問題がある。

問題 1. シテアルには、意図性が感じられない、次のような文がある。

(5) えっ、なんで？ 窓が開けてあるよ!!! ちゃんと閉めて出たのに...

(6) 困るなあ。窓が開けてあったので、部屋がびしょびしょだ。

ここでは、言語主体の思惑に反して窓が開いた状態にあることを意味し、動作主の意図性はさほど感じられない(杉村 1996: 68-70, 原沢 2005: 23-32)。

問題 2. 意図性を表すからには意志動詞のはずであるが、無意志動詞からも作られる。そこに意図性はない(杉村 1996: 64-70)。

(7) おもちゃで部屋が散らかしてある。

(8) 机の上に弁当が忘れてある。

問題 3. シテアルとシテイルとで意味の対立のない中和的な場合がある。

(9) あらかじめ落ち合う時間を花子に知らせてあったのだ。

(10) あらかじめ落ち合う時間を花子に知らせていたのだ。

(9), (10) のような文は明らかに、意図性のある動作を表しており、区別が難しい。益岡 (2000: 105-107) はこのようなシテアルの《ペルフェクト perfect⁽¹⁾》用法はシテイルと置き換え可能であるとしている。

以下では、意図性以外の観点からシテアルとシテイルの使い分けを明らかにするため、調査を行い、現代標準日本語におけるアスペクトの使用条件について論じる。

1. 先行研究

これまでの研究では次のようなことが強調されてきた。i) シテアルは意図性をもつ(高橋 1976: 128, 寺村 1984: 148, 益岡 1987: 219 など), ii) 統語的観点から2つの類型が区別でき、この分類が意味的特徴とも密接に関りあっている(森田 1977: 51-55, 益岡 1987: 219-233, 杉村 1996: 64), の2点である。

I. NP (Patient=対象, 以下P) -ga V-te ar ⇒ 結果の状態

(11) きょうは一椀のめしと和えもの、干魚がちまちまとそなえてある。

(司馬遼太郎『歲月』)

II. NP (Agent=動作主, 以下A) -ga NP(P)-o V-te ar ⇒ ペルフェクト

(12) 僕は飛行機の予約をしてあるのだ。(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』)

Iは基本的意味, IIは派生的意味とされる。また, これらの中間的なものも存在し, 連続体をなす(森田 1971, 益岡 1987, 杉村 1996)。

(13) a. 空気を入れ替えるために窓(が, を) あけてあるんだ。

b. 汚れを払う意味で塩(が, を) まいてある。

c. スイッチ(が, を) 切ってあるのは, 感電するといけないからです。

d. 線香(が, を) つけてあるから, 蚊がいても大丈夫だ。

(森田1971)

こうした中で, i) にかんしては(7), (8)の文のように, 杉村(1996:64-70)が「テアル構文には非意志的な行為によるものも存在し, 必ずしも意志的行為の結果を表わすとは言えない」と述べ, シテアルの意図性を否定している。

また, 次のような説明も見られる。

(14) 益岡(1987:202-203)

テイル形は基本的に主体の変化の結果を表わし, テアル形は基本的に客体の変化の結果を表わす

副島(2003:11)もおなじような説明を提示し, シテアルの「対象指向性」を指摘している。

両者の説明はシテイルとシテアルとの違いを意図性という観点からではなく, 主体-客体という観点から説明している点で, ほとんど同じものである。また, シテアルの成立条件とそれに接続する動詞の他動性との関係について論じたものには, 高橋(1969), 吉川(1973), 森田(1977), 益岡(1987), 杉村(2002), 杉村(2003)等がある。本稿でも, これらを受けて, シテイルとシテアルとを対立する形式として捉え, これらの違いがシテアルの「対象指向」的な特徴, および, 動詞そのものの語義に備わっている「他動性」の観点から説明できるという仮説を提示する。

これらに意図性という観点をもちこんだものに原沢(2005)の説明がある。

(15) 原沢 (2005 : 36-37), 表4, 枠④内の () は筆者

用 法	非意図的	意図的
1. (主体がかかわる) 行為の結果	①テイル	②テアル
2. (主体がかかわる) 非行為的状态	③テイル	—
3. (客体にかかわる) 行為の結果	④テアル (意図的/非意図的)	
4. (客体にかかわる) 非行為的状态	⑤テアル	—

これによると, 上記Ⅱのような主体がかかわる行為の結果を表わす場合には意図性と関連してシテイルとシテアルが使い分けられるという説明が提示されている。

以下では, この場合に生じる問題を見ていこう。①, ②で意味の違いが意図性の有無にある, とするが, シテイルにもシテアルにも意図的である場合とそうでない場合がある。

(16) 太郎は花子の電話番号を既にメモ帳に書いてあった。(意図的である)

(17) 太郎は花子の電話番号を既にメモ帳に書いていた。(意図的である)

(18) 元旦に友達に出した年賀状が戻ってきたので見たら, 細かい番地を書き忘れてあったので, 自分でも啞然。(意図的でない)

(<http://nimono.exblog.jp/2955674/>)

(19) 元旦に友達に出した年賀状が戻ってきたので見たら, 細かい番地を書き忘れていたので, 自分でも啞然。(意図的でない)

例えば, (17) のように意図性をもつシテイルもあれば, (18) のように意図性をもたないシテアルもある。これらの文から, シテアルには問題なく意図性がある, 目的意識を持つという点でシテイルと相補関係にある, と断言することはできないであろう。無理して言えば, 以下の例 (21) のように「書き忘れていた」は宛名書きを命じた者への嫌がらせのために, あえてそうしたという意味で使う場合に不自然となり, (20) のように「書き忘れてあった」ではそれが比較的的自然であると言えるが, それではこじつけじみでいて意図性という観点を導入する意義としてはかなり苦しい。

(20) ? 私は, 年賀状が届かないようにしようと, 細かい番地を書き忘れてあった。

(21) ?? 私は, 年賀状が届かないようにしようと, 細かい番地を書き忘れていた。

原沢 (2005 : 32) はまた, ④のような客体にかかわる行為の結果を表わすシテア

ルには意図的な場合と非意図的な場合があり、意図性は絶対的なものではないと主張しており、意図性という観点がシテアルの意味を説明するのに、さほど重要ではないことをはからずも示唆している。

このように多くの研究において、シテアルを意図性の観点によって説明しようとするという問題が生じた原因は次の2つの事実にあると思われる。

1) 語彙の側面（他動詞か自動詞か; 動詞の意志性の有無）と形の側面（シテイルかシテアルか）を区別しなければならない⁽²⁾が、従来のシテアルの研究では区別していない。

2) シテアルとシテイルの意味が明快に二分されるものと考えていたため、(9)、(10)や(16)-(19)のような例文で示されている中間的な例の処置に苦しんだ。

一般に、何かを比較するときは、条件を一定にすることが大切である。シテアルとシテイルにおいても、その形をとる動詞が他動詞か自動詞かによって表す意味が変わるであろう。シテアルと意図性がどのようにかわるかを考察することは重要なことではあるが、動詞の自他の問題とシテアル-シテイルの問題とを混在させることで見えなくなることもあろう。

- | | | |
|------------------|---|----------------------------|
| (22) 窓を開ける (意図的) | { | 窓を <u>開けている</u> (主体の動きの継続) |
| | | 窓が <u>開けてある</u> (客体の変化の結果) |
| (23) 窓が開く (非意図的) | { | 窓が <u>開いている</u> (主体の変化の結果) |
| | | *窓が <u>開いてある</u> (非文) |

このように、条件を一定にして考えると、シテアルとシテイルの違いはより明快に説明できる。(22)のような他動詞がシテイルをとると基本的に「主体の動きの継続」を表し、一方シテアルは「客体の変化の結果」を表す。(23)のような自動詞がシテイルをとると基本的に「主体の変化の結果」を表すが、シテアルは対応する形がない。こうしてシテイルは主体、シテアルは客体にかかわる行為の状態を表す、と説明することが可能となる。(23)のような自動詞のシテアルが不可能なのは、客体というものが存在しないからであるということは、既に自明のことである。

シテアルの研究においては、もう1つ重要な問題がある。それは次の例(24)のような動きを表す自動詞のシテアルである。この動詞の特徴は意志動詞であり、自動詞が取る項の意味役割は動作主であるという非対格仮説 (unaccusative hypothesis) における非能格動詞 (unergative verbs) に重なる。非対格仮説は、自動詞に、無意志で主語の意味役割が対象である非対格動詞 (unaccusative verbs) と非能格動

詞が存在するという仮説である。

(24) 午前3時からサッカーの実況中継があるので、それに備えて十分に寝てある。
 このような文は客体がなく、主体-客体という観点からは説明できないように見える。
 管見では、こうした場合も含めつつシテアル自体の意味を明快に説明した研究はほとんどない。

以下、他動性という考えを用いて、上記の問題の解決を図る。

2. 調査の方法と結果

シテアルとシテイルとは他動性の観点から区別可能であると仮定する。シテアルが客体にかかわる行為の状態を示す形式であるなら、他動性が高ければ高いほど、客体の存在も確かなものとなるので、シテアルの文が作りやすく、逆に他動性が低ければ作ることができないということになる。一方、シテイルはそのことに関しては何とも言えない、となる。

ここでは他動性をHopper and Thompson (1980) やJakobsen (1989) が論じているプロトタイプ論としてとらえ、その特徴をどの程度持っているかによって動詞が段階的に区別されるものとする。ただし本稿は意図性を他動性の要素とみない(角田 1991: 81-86)。

こうした他動性とシテアルの相関を調べるため、2005年6月にアンケート調査を行い、沖縄県内大学在籍の日本語母語話者52人から回答を得た⁽³⁾。この調査では、まず、シテアルの形がないとされる、非対格動詞、知覚、追求、知識、感情、関係、能力等を表す動詞などを除外し、それ以外の動詞から35の動詞を抽出し、次の5つのグループに分けた。

- A: 主体動き客体変化動詞: 並べる, 置く, 書く, 買う, 作る, 脱ぐ, ひらく, 壊す, 教える, 産む, 着る
- B: 主体動き客体無変化動詞(「が-を」): 読む, 呼ぶ, 生かす, 忘れる, 覚える, ついばむ, 見る, なでる, 歌う
- C: 主体動き客体無変化動詞(「が-に」): 触る, 登る, 協力する, 反対する, 親しむ
- D: 相互再帰動詞: 結婚する, 争う, 浴びる
- E: 主体動き動詞: 行く, 座る, 通う, 走る, 歩く, 寝る, ダイエットする

この分類の基準としては、角田 (1991: 80) を踏まえて、次の4つを用いた。
 (ア) 動作主の対象に対する働きかけの有無, (イ) 対象の変化の有無, (ウ) 「が-を」

構文か否か, (エ) 直接受身が可能か否か。最初の2つは意味, 残りの2つは文法に関する現象である。

(ア) 動作主の対象に対する働きかけ。Eグループはないが, 他のグループはある。

(イ) 対象の変化。Aグループは動詞のもちまへの意味に対象の何らかの変化(移動, 停止, 授与, 出現, 消滅などを含む)が含意されるが, 他のグループにはない。

(ウ) 「が(-に)-を」構文。A, Bグループでは普通だが, 他は(「浴びる」以外)とらない。

(エ) 直接受身。D, Eグループは(「争う」以外)直接受身が作れないが, 他は可能。

すなわちAがすべての要素をもつため, もっとも他動性の高いプロトタイプの他動詞であり, BからCへ, CからDへ, DからEへ行くにしたがって他動性が低くなる。

さて, この調査で, 被調査者に各動詞がシテアルの形をとる場合の自然さを判断してもらい, 「自然」, 「おかしい」, 「どちらとも言えない」のどれかを選んでもらった。文脈なしで典型的意味として自然かどうかを判断してもらうため, 例文の形ではなく, 「～てある」

の形で動詞のみを提示した。

「自然」という答えには2点, 「どちらとも言えない」には1点, 「おかしい」には0点を与えて, 各動詞ごとに平均

表1. シテアルの自然さについての平均値

	A	B	C	D	E
\bar{X}	1.537 ^a	0.772 ^b	0.422 ^b	0.367 ^b	0.303 ^b
(SD)	(0.551)	(0.476)	(0.187)	(0.145)	(0.167)

点を出した。もし, ある動詞について, 全員が「自然」と判断すれば, その動詞の平均点は2点になり, 全員が「おかしい」と判断すれば, 0点となる。該当する動詞の平均点を図1に示す。図1は, シテアルの自然さと他動性が相関することを, 全体としてはほぼ表している。

分散分析の結果 $F_{(4,30)}=12.91$, $p \leq .05$ で他動性の効果が有意であることが示され, テューキーのHSD法による多重比較の結果, AグループとB, C, D, Eグループとの平均値の間に有意な差が認められた(表1⁽⁴⁾)。

個々のグループについて, 見ていこう。

[A] 主体動き客体変化動詞: 並べる(1.98/2.0), 置く(1.98/2.0), 書く(1.98/2.0), 買う(1.9/2.0), 作る(1.88/2.0), 脱ぐ(1.83/2.0), ひらく(1.58/2.0), 壊す(1.42/2.0), 教える(1.17/2.0), 産む(0.9/2.0), 着る(0.29/2.0)。

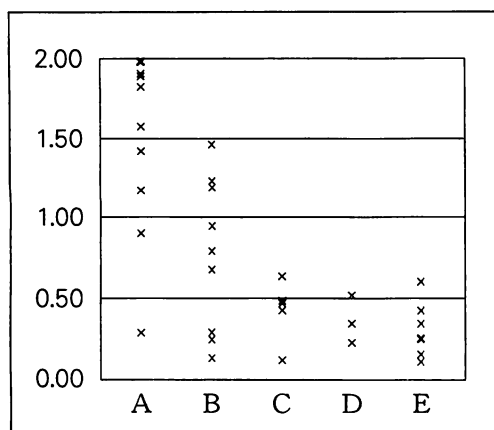


図 1. シテアルの自然さ

[D] 相互再帰動詞: 浴びる (0.52/2.0), 結婚する (0.35/2.0), 争う (0.23/2.0)

[E] 主体動き動詞: 行く (0.60/2.0), 座る (0.42/2.0), 通う (0.35/2.0), 走る (0.25/2.0), 歩く (0.25/2.0), ダイエットする (0.15/2.0), 寝る (0.12/2.0)

シテアルはAグループの動詞であるとき、最も自然な形となる。Bグループの自然さは全体的にAグループよりもやや低い。C, D, Eグループの動詞はBグループよりも落ちる。

以上、他動性がシテアルの自然さと相関することを示した。この相関の背後には、以下のような意識があるのだろう。他動性が高いほど、対象の存在は強固となり、眼前の状態の主と同一視しやすい。対象を状態の主と同一視しやすい程、言語主体は、対象に視点をおいて表現したくなる。こうして、客体の状態を表すシテアルの使用が自然なものとなる。

3. シテアルが自然となる条件

調査に用いた動詞はこれまでシテアルが可能であると考えられてきた動詞であったが、実際にはC, D, Eグループの動詞ではシテアルは自然ではないという判断が大半を占めた。意志動詞は全グループにわたってあったが、容認可能なものとそうでないものとで有意差がみられたので、シテアルの容認度の違いを意図性には求められない。C, D, Eグループの動詞がシテアルの形をとっても不自然ではない条件というのは何か、ここでは考えてみたい。

調査の結果から判断すると、Aグループにあって、C, D, Eグループにない特徴は対象が変化するという「被動作性 affectedness of object」である。そこで、他

動性が低い動詞も文脈その他で被動作性を補えばシテアルが可能である、と仮定し、以下検証していく。

[A] 主体動き客体変化動詞: 無条件でシテアルが可能である。

(25) テーブルにお皿が並べてある。

(26) プレゼントが買ってあった。

[A] の「壊す」などの動詞は、対象に変化を起こすという含みがある。例えば、何かを壊せば、必ずその対象に損壊という変化、正常な状態から壊れた状態への変化、が起こる。(25) も (26) も、動詞そのものの意味が、対象である「皿」や「プレゼント」の位置や所有権の変化を表している。被調査者の大部分がこれらの動詞を自然とみなしたということは、これらがシテアルに用いられる典型的な動詞であり、典型的な用法であると言える。

益岡 (2000: 101) はこれらの動詞のシテアルが表す《変化の結果の継続》の意味を《ペルフェクト》に比べて使用頻度が高いことから、副島 (2003: 4-5) は条件の限定が少ないことから、基本的な用法であるとしたが、この調査はそれを裏付ける結果となった。

一方、「産む」や「着る」はBやCの動詞より低い数値であったが、次のような実例が示すとおり、決して不自然な形ではない。

(27) 中庭にキャベツを植えたら早速卵が産んであった。

(<http://www.morinogakko.com/classroom/rika/musi/aomusi/>)

(28) 今日は泳げるといので、水着を下に着てある。

(<http://tabitora.3.pro.tok2.com/tabinikki/madagascar/madagascar9.htm>)

なお、「着る」のような着衣・装身に関わる動詞は、「着ている」のほかにも「はいている」、「(めがねを) かけている」など、シテイルで結果の状態を表すことができるため、シテアルが用いられることは実際あまり多くない。また、これらの動詞が着衣・装身をする人自体の状態の変化を表していると考えれば (益岡1987: 212-213), 他動性は低くなる。そのため、今回の調査でもDグループやEグループの動詞と同様、不自然だと判断されたのであろう⁽⁵⁾。

[B] 主体動き客体無変化動詞 (「が-を」): 動作主の働きかけは必ず対象に変化を起こすという含みはないが、対象に及んでいる。例えば、誰かを呼んだら、その声を聞いて振り向くかもしれないが、振り向かないかもしれない。働きかけは対象には届いているので、その変化が認識される状況が設定されれば、比較的容易に被動

作性をもつようになる。

(29) 今日の結婚式には恩師を呼んであるので、ご挨拶してこよう。

(30) せりふをきちんと覚えてあったので、恥をかかずにすんだ。

(29) では結婚式に恩師がおり、(30) ではせりふが頭の中にある状態であり、行為の結果対象にそういう変化がおこった、という被動作性が認識できる。

[C] 主体動き客体無変化動詞（「が-に」）：動作主の対象に対する働きかけはあるが、対象に届いているかどうかは不明であるため、対象の変化が認識される状況は設定しにくい、働きかけの影響が動作主に及び、有効性がその変化として認識できる状況なら設定可能である。こうした、被動作性が対象でなく、動作主が動作を被り、目に見えない変化を起こすことにまで拡張して適用された場合、「影響性 affectedness of subject」と呼ぶことにする。

(31) 趣味は山登りで、もちろん富士山にもとつくに登ってある。

(32) 大学祭の準備は大変だったが、みんなで分担し、協力してあったので、成功した。

(31) では富士登山の経験が動作主にある状態、(32) では準備にみんなが協力した効果で大学祭が成功した状態を示し、ともに行為の影響が残った、という影響性が認識できる。

[D] 相互再帰動詞：動作主の働きかけが対象と相互的か、動作主にそのまま帰ってくるような動作を示すため、Cグループと同様、純粹に対象の変化は認識されない。シテアルを用いるには働きかけの影響が動作主に及ぶ影響性が確認できる状況設定が必要となる。

(33) シャワーをすでに浴びてあるので、このまま寝るつもりだ。

(34) I-130申請の際には日本の戸籍に結婚してあるという事実が反映されていればいいので。 (<http://www.canada-guide.com/bbs/show.html?1853>)

(33) ではシャワーを浴びた結果、動作主の体がきれいになった状態、(34) では結婚したという経験が動作主にある状態を示し、影響性が確認できる。

[E] 主体動き動詞：もともと対象がなく、主体の動きのみを表すため、対象の変化は当然認識されない。シテアルを用いるには影響性が必須となる。

(35) 今朝はホテルのオーナーがカウンター当番だった。家族経営らしく息子さんと交代で座ってある。

(<http://www5a.biglobe.ne.jp/~takeko/tabi2-16.htm>)

(36) すでに山の辺の道を奈良から桜井まで歩いてあったので, 桜井から初瀬街道を長谷まで辿り, そこから伊勢本街道を伊勢奥津まで歩くことにした。

(<http://www.hpmix.com/home/takase/E21.htm>)

(35) では座る行為がホテルのオーナーと息子さんとの間で繰り返され, 「今朝」もその有効性が現存している状態, (36)では奈良から桜井まで歩いた経験が動作主にある状態を示し, とともに動作主が再帰的に動作主へはたらきかけ, 自らに何らかの影響をもたらす影響性が認識できる。

以上のように, C, D, Eグループの動詞では, 動作主の働きかけにより, 行為の影響が動作主に及ぶという影響性の状況を設定することで, シテアルを用いることが可能となる。このときシテアルが示すのは「結果の蓄積」, 「有効性の持続」とも言われる派生的意味《ペルフェクト》である。

本稿で強調したいのは, この《ペルフェクト》の用法が, 意図性ではなく, 影響性に由来しているということである。(31), (34), (36)の例は動作主の経験を表しており, 「何かの目的のため」や「前もって準備」といった状況ではない。意図性はこの影響性の範囲内にあり, しばしば付随するだけである。

影響性があれば, AグループやBグループの動詞からも作られる。

(37) 1人でテーブルに20枚もお皿を並べてあるので, 十分働いたといえる。

(38) 太郎は花子に誕生日プレゼントを買ってあったが, 渡せなかった。

(39) 昨日の記事はすでに読んであるのだが, 事件については知らなかった。

(40) テロリストは3日前にはまだ人質を生かしてあった。

さて, ここから, シテアルに現れる意味を整理すると, 次のようになる。

表2. シテアルの意味と条件

	意味	用法	動詞の種類	条件
I	変化の結果の継続 (基本的意味)	変化の結果生じた客体の 状態	A	なし
			B	被動作性の付与
II	ペルフェクト (派生的意味)	以前の動作の効力が基準 時まで持続している状態	A-E	影響性の付与

この2つの意味関係をあらためて確認すると, 調査結果から見てまずIがシテアルのプロトタイプの意味であると考えて問題ないであろう。IIの意味は, Iから

の拡張関係，すなわち，形のある対象の結果の状態を抽象的な（形のない）動作主の結果の状態へと喩えることによって成立したものである。

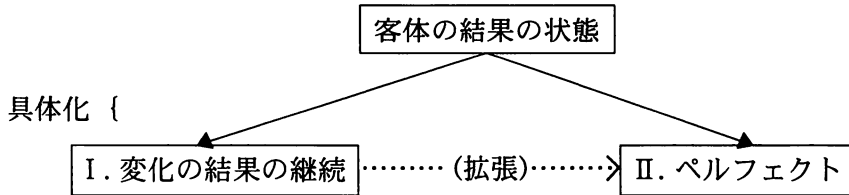


図2. シテアルの表す意味の連関

4. シテアルの意味分析

本稿では，現代日本語動詞のシテアルの形式の意味のありかたをめぐって考察を行った。具体的には，シテアルが実現しやすいのは他動性のもっとも高いプロトタイプ的他動詞であり，シテアルが対象志向的な特性を持つことと，それ以外の動詞の場合に実現する際の諸条件を明らかにし，シテアル自体の意味には意図性がないということ了指摘した。つまり，この形式は基本的に，主体動き客体変化動詞において客体の《変化の結果の継続》を表すが，派生的には，影響性の付与という特定の条件の下で《パルフェクト》を表す。

動詞にかかわる状態的な側面はシテイルとシテアルとが互いを補う形で分担する補完関係にある。他動詞の場合，シテイルは主体の動きの側面，シテアルは客体の変化の側面を表す。シテアルは基本的に自動詞の用法はないので，シテイルが動きの側面も変化の側面も表す。しかし，派生的意味においてはこの補完関係があいまいになり，シテアルもシテイルも《パルフェクト》を表す。その場合，自動詞でも非能格動詞ならシテアルが可能となる。

《パルフェクト》のシテイルとの使い分けは多少のニュアンスの違いであるが，意図性ではなく，対象指向性，言い換えると，動作主との関わりの少なさで説明できる。シテアルには意志・勧誘形，命令形，願望態等いわゆる主観表現や受け身形，授受表現を後接できないことが既に指摘されている（副島2003: 8-9）。また次のように動作主を疑問詞にした疑問文も作りにくい。

(41) ? 東京行きの飛行機をすでに予約してあるのは誰?

(42) 東京行きの飛行機をすでに予約しているのは誰?

このことを簡単に整理すると，シテアルでは言語主体は眼前の状況にたいして「誰

がそうしたか」には関心がない。したがって、シテイルに比べると、「何でそうになったか」の方に目が向き、しばしば問題にされる「目的意識」、いわゆる「前もっての準備」のニュアンスが生じやすくなることがわかる。

(43) 東京行きの飛行機をすでに予約してあるのは何のため?

(44) 東京行きの飛行機をすでに予約しているのは何のため?

以上の考察の結果は表3のようにまとめられる。

表3. シテアルーシテイルと他動詞ー自動詞の関係

他動性		強い → → → → → → → → 弱い				対象指向性
		他動詞	自動詞			
			非能格性	非対格性		
シテアル	基本的意味	①対象の変化の結果	——	——	強い	
	派生的意味	②ペルフェクト			↓	
シテイル	派生的意味 ⁽⁶⁾	③ペルフェクト ④くりかえし ⑤単なる状態 ⁽⁷⁾			↓	
	基本的意味	⑥動きの継続	⑦動きの継続	⑧変化の結果	弱い	

これらの用法の例文は以下の通りである。

(45) ①パソコンが壊してあった。

⑤道が曲がっている。

②既に3ヶ月前から減量してある。

⑥パソコンを壊していた。

③既に3ヶ月前から減量している。

⑦(その時は) ジョギングしていた。

④毎日ジョギングしていた。

⑧パソコンが壊れている。

このように、シテアルが客体の状態を表すということが今回の調査と分析から検証でき、シテイルとシテアルの相補的な役割についても、前述した(14)の益岡(1987)の定義のとおり、基本的にシテイルが主体の状態、シテアルが客体の状態を表すということが確認できた。これまであまり触れられてこなかった点として、シテアルの容認度が他動性が高いほど上がる、ということがあるが、他動性が高いというのはつまり対象への注目度が高いということであり、客体の状態を表すシテアルに固有の特徴「対象指向性」としてシテイルとの補完関係を認めることができるだろう。

5. 結

本稿は、シテアルの形が自然に感じられるのは他動性の高い動詞であり、シテアルの典型的な意味が対象の《変化の結果の継続》であること、また、派生的な《ペルフェクト》用法にもシテイルにはない対象志向的な特性があるということを明らかにした。そして、意図性の問題はシテアルの形式に固有の特徴というよりも、動詞の自他の問題である、ということ論じた。

従来の日本語のシテアルの研究は意図性に重点を置きすぎたきらいがある。他動性の高い動詞に意志動詞が多い、というのは事実であるが、本稿で試みたような、語彙的側面と文法的側面の全体を考慮する研究方法のほうが、シテアルの理解には適切だと思われる。

なお、今回の調査における被調査者52名のうち、48名は沖縄県出身者であり、方言の影響が予想されたため、調査時にはできるだけ「標準日本語」を想定して答えてもらうように指示をした。とはいえ、沖縄地方の地域語（ウチナーヤマトウグチ（沖縄大和口））の特徴として、ヴォイス、特に「自動詞 + テイル」と「他動詞 + テアル」の使用に共通語とずれがあることが指摘されている（高江洲 1994：267）ことに鑑みると、調査結果に被調査者の方言が多少影響を及ぼしている可能性もある。また、本稿で引用したインターネットからの用例の中には、「日本語」の用例として適否の判断に迷うものもあるかもわからない。今後はこうした日本語の地域差、個人差を考慮した詳細な調査が必要であろう。

註

- (1) 以前に成立した運動の効力の現存を表すものである。(Nedjalkov (ed.) 1988)
 (2) 例文(2)のシテアルと例文(3)のシテイルで(2)のほうに意図性が感じられるのは、それが他動詞だからである。スルの形をとった次の(i)と(ii)の文を比べると、(i)の表す動作には明らかに意図性があり、(ii)には見られない。

(i) 誰かが窓を開けた。

(ii) 窓が開いた。

また、(iii)の文のようにシテイルでも受け身の形をとれば意図性が感じられる。

(iii) 窓が開けられていた。

このように、意図性の有無は動詞の文法的な形がシテアルか、シテイルかにあるのではなく、語彙としての動詞が自動詞か、他動詞かにある。

- (3) 被調査者52名の出身地の内訳は沖縄48名および長野, 福岡, 熊本, 大分各1名であった。方言の影響を排除するため, 調査時には「標準日本語」を想定して答えてもらうように指示をした。
- (4) 同じアルファベットが付いていない条件の間にはチューキーのHSD法による多重比較の結果, 5%水準で有意な差が認められたことを示す。
- (5) 「着る」をAに分類することの妥当性については, 査読者からも「脱ぐ」との違いからむしろDの相互再帰動詞と共通した性質を持つのではないかと指摘を受けた。確かに「水着を着る」は, 動作の結果, 動作主に直接影響が及ぶ「再帰動詞」の性質を持ち, 「水を浴びる」と大差ないようにも見える。この点にかんしては, 少なくとも本稿で用いた分類基準からははっきりさせることはできなかったが, 今後の研究課題として考慮していきたい。
- (6) 本稿では, ある特定の条件の下, 制限された条件の下で働くものを派生的意味, 条件の限定の少ないもの, あるいはないものを基本的意味と位置づける。シテイルの派生的意味もある一定の条件の下で起こるものであるが, 一方で, どんな動詞と共起するか, といった制限がなく, 動詞の他動性にも影響されない。したがって表上の③, ④, ⑤の順は便宜的なものであり, 他動性の強弱と無関係である。
- (7) ここでいう「単なる状態」とは, 「彼女のものの言い方は, どことなくのんびりしている」や「鼻は顔の真ん中についている」のように, 動詞を形容詞的に使い, ものの状態的な性質を述べるシテイルの用法をさす。

参考文献

- 原沢伊都夫 (2005) 「テアルの意味分析 — 意図性の観点から —」『日本語文法』5巻1号: pp. 20-38
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) 'Transitivity in grammar and discourse.' *Language: Journal of the linguistic society of America*, Volume 56, Number 2: pp. 251-299.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- Jacobsen, Wesley M. (1991) *The transitive structure of event in Japanese*. Tokyo: Kuroshio Publishers.

- 金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』
ひつじ書房
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
———(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 森田良行(1971)「『本が置いてある』と『本を置いてある』」『講座正しい日本語
第5巻文法編』pp. 174-188. 明治書院
———(1977)『基礎日本語』角川書店
———(1988)『日本語の類意表現』創拓社
- Nedjalkov, Vladimir P. (ed.) (1988) *Typology of resultative constructions*.
Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 副島健作(2003)「シテアルとスル-シテイルとの関係について」『留学生教育』1:
pp. 31-52. 琉球大学留学生センター紀要
- 杉村泰(1996)「形式と意味の研究—テアル構文の2類型—」『日本語教育』91: 61-
72.
- 杉村泰(2002)「意志性のない—テアル構文について—」『言語文化論集』第24巻
第1号: 159-174. 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究所
- 杉村泰(2003)「テオク構文とテアル構文の非対称性について」『言語文化論集』第
24巻第2号: 95-110. 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究所
- 高江洲頼子(1994)「ウチナーヤマトウグチ — その音声, 文法, 語彙について—」
『沖縄言語研究センター研究報告3 那覇の方言 那覇市方言記録保存調査報告書I』
沖縄言語研究センター(編). 245-289.
- 高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」金田一(編)(1976). pp. 117-153.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』
金田一(編)(1976). pp. 155-323.

例文で特に出典を示してあるもの以外は作例である。URLはインターネット上で公開されているホームページから(検索エンジンは「Google」を使用, 検索期間は2006年3月)。

A Study of the *Shite-aru* Form in Terms of Transitivity

SOEJIMA, Kensaku

Keywords : transitivity, affectedness of subject, object-oriented, resultative, perfect

Abstract

The *Shite-aru* form has been analyzed to date as the expression of a state resulting from some previous volitional action. However, it still remains to be seen as to what kind of verbs is more naturally used with the *Shite-aru* form. Therefore I surveyed native speakers of Japanese belonging to a university in Okinawa on naturalness of the *Shite-aru* form, and pondered the difference of use between that form and the *Shite-iru* form and condition of its use. As a result, it became clear that the *Shite-aru* form is most naturally used with prototypical transitive verbs. In addition, the paper shows that the *Shite-aru* form with transitive verbs deviated from prototype was possible, if it is used under the situation that an influence of the previous action is recognized to the subject. Lastly I point out that the *Shite-aru* form has the object-oriented feature.

(University of the Ryukyus)